

3. 野尻(3)遺跡出土の鏡について

はじめに

今回の調査では、第3号住居跡から、鏡と思われる鉄製品1点が出土した。この鏡は、正純密教（空海請來以降の密教）以前の古密教—雜部密教—（以下、雜密）の修法で用いる法具とされ、県内における確実な出土例としては五輪野遺跡が挙げられる。このような仏具の出土は、古代北東北における仏教の浸透とその実体を示す資料と考えられる。ここでは、遺物の出土状況や詳細な観察を行った上で、県内や県外の類例を含め位置づけを行いたい。

出土鏡について

(1) 出土状況

調査区の南に位置する第3号住居跡から出土した。第3号住居跡は、東南東方向に軸をとり竪穴部と掘立部で構成され、鏡は、竪穴部の北西寄りから出土した。床面よりやや高い位置からの出土である。住居内の遺物は、堆積土の観察から、やや地形的に高い西方向から主に廃棄されたような状況が窺える。住居堆積土に鍵層となる火山灰が確認できることや出土遺物の検討から白頭山苦小牧火山灰降下以後の10世紀中葉以降と考えられる。鏡の出土状況は、廃棄されたような状況であり、その使用方法を窺うことはできない。

(2) 観察（図1模式図、図144-1）

把部が欠損しており、その基部と鈴部のみが残存する。鈴部も下半部の2分の1が欠損し、そのため口の部分が不明確である。残存部から、口部は肥厚しない形態であることがわかる。丸は、残っていない。所々に鉄錆による大きな膨れが認められ、大きさは、長さ8.1cm（残存長）で、鈴部は径7.9cmの球形を呈する。球の中程には、段差があり半球状のものを接合した痕跡が窺われる。1ヶ所に鉄膨れとは思われない方形の塊が認められ、上下の接合のために留められた鉄板の可能性がある。他にこのような塊は認められない。厚さは、現状で2.5mmから最も厚いところで5mmほどである。内外面とも鉄錆が顕著で、内面は鉄錆色が強く、外面は黒色がかった暗赤灰色を呈す。外面には、所々僅かに緑青と思われる付着物が認められる。

把部は、鈴部の頂部中央に取り付けられている。幅は、約1cmで断面形は方形を呈す。欠損部の観察から中空であることが確認できる。銅製三鈷鏡に比べて細身であることが特徴である。

(3) 製作技法について

遺物の観察から、製作方法について考察する。まず、把部と鈴部は鍛造による別作りであり、鈴部に穿った穴に把部を差し込み接合している。把部は、中空であることから鉄板を折り曲げ方形に形作っているものと思われる。鈴部は、上下別作りの半球を下を上に被せるような形で接合している。鈴部下半部は、半球状ではなく更に半分にしたものを作り付けて口部を創出した可能性も考えられるが、五輪野遺跡の例から半球同士を接合したもののが可能性が高い。次にこのような把部と鈴部、鈴部の上半部と下半部の接合方法が問題となる。遺物の観察では、外面に緑青と思われる付着物や銅色の付着物が僅かに認められ、特に接合部付近に顕著である。X線写真でも付着物や接合部付近は、

質量の高いことが確かめられる。鉄製品に付着する銅の理解については、村上氏らによる「銅鑑」を用いた鉄接合技術の研究が挙げられる（註1）。主に関東地方出土の9世紀以降の鉄製品の分析から、「銅鑑」を発見し、鉄接合技術の一端を明らかにした。本遺跡出土の鏡に付着している銅が「銅鑑」技術によるものか分析を経ていないので判断はできないが、このような鉄製品における銅付着の要因として説明し易い。

鉄製三鈷鏡の類例と鉄鈴（図144）

(1) 鉄製三鈷鏡

古代における鉄鏡は、県内から5遺跡10例とされる（表1・註2）。しかしながら、一般的な鏡の大きさに比べてやや小さく、鏡とするには疑問が残るものも含まれることから、これらについては鉄鈴に止めた。鉄製鏡の確実な出土例としては、五輪野遺跡の2例である。

2は、第33号住居跡出土のもので完形であり、全形を窺える資料である。全長35cmであり、銅製三鈷鏡が大きいものでも20cm前後であるのに対して長い。三鈷の形は、初期の銅製三鈷鏡に比べて極めて形骸化・簡略化している。3は、把部を欠損し潰れてはいるが、把部の一部や鈴部の口が確認でき、大きさも1とほぼ同じであることから鏡と判断できる。おそらく、三鈷鏡であったと思われる。当遺跡出土のものを五輪野遺跡例と比較すると、鈴部の径が約8cmとほぼ同じであること、把部の断面が正方形に近い方形であること、半球同士を真ん中で下を上に被せる形で接合している点から同種の遺物とみることができ、鏡の可能性が高い。五輪野遺跡例は、ともに住居内で床面からやや高い位置から出土している。張り出しを持つ住居構造で、ともに張り出し部付近からの出土である。鏡を出土した2軒の住居は重複し、同じ場所に同じ構造の住居が作られている点は、注目される。報告のなかでは、共伴遺物の土師器壺の検討から年代を推定しており、胴部のヘラ削りと口縁部の横ナデ調整の類例を野尻(3)遺跡や日光男体山出土壺G類に求め、10世紀後半に位置づけている（註3）。

このような鉄製の鏡は、県外では日光男体山山頂遺跡H地区出土、岩手県宮古市山口館跡第14号住居跡出土の2例のみである。12の日光男体山例は、鈴部を大きく欠損するが三鈷の形態など五輪野例に類似する。三鈷や把部の長さは、五輪野例よりやや短い程度であり、その断面形も方形を呈する点で共通している。13の山口館例も五輪野例とほぼ同じ大きさである。これらの3遺跡の鏡は、鉄製というほかに製作技法において共通性がある。三鈷は薄めの鉄板で形作られており、日光男体山例を除いて中鈷と脇鈷は先端で接合されている点、把部は、断面方形であり、銅製と比較して細めである点、鈴部は半球状のものを下半分を上半分に被せる形で接合しており、口は肥厚しない簡素な作りである。鉄製を含め三鈷鏡については、すでに時枝氏によって集成と位置づけが行われている（註4）。そのなかで、鉄製においては、巨大化と三鈷の退化が指摘されており、最古のもので9世紀代、他は10世紀代と推定している。

(2) 鉄鈴との関係

当遺跡出土の鏡の類例を集成する過程で、鉄鈴と報告されているなかに鏡の可能性があるものがあり、また両者の製作技法に共通性があることがわかった。よって鏡と鉄鈴との関係について検討したい。県内における鉄鈴の出土は、5遺跡10例であり（表1）、すでに下山氏による集成が行われて

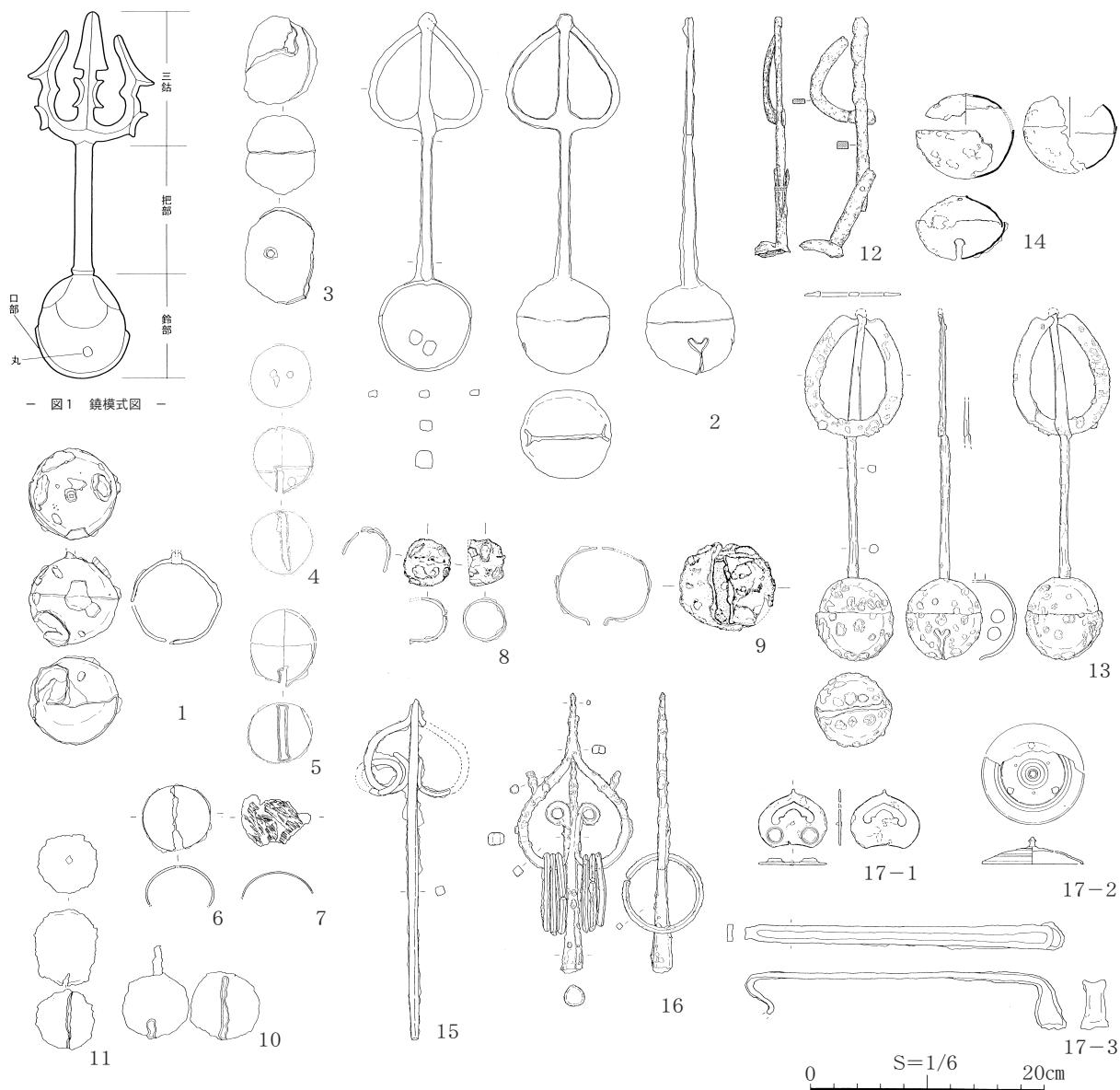


図144 県内出土の鉄製三鉢鏡・鈴・錫杖・柄香炉とその類例

表1 県内出土鉄製三鉢鏡と鉄鈴一覧

| 番号 | 遺跡名 | 遺構名 | 鈴部の大きさ (径・厚さcm) | 備考 | 文献 |
|------------|--------|--------------|------------------|-------------------------|----|
| 鉄製鏡 | | | | | |
| 1 | 本遺跡 | 第3号住居跡覆土 | 7.9・0.25~0.5 | 緑青付着 | 1 |
| 2 | 五輪野遺跡 | 第33号住居跡張出部覆土 | 7.8~8.0・0.15・0.2 | 完形・丸2個 | |
| 3 | | 第32号住居跡覆土 | 推定8.0・- | 潰れている。柄香炉出土 | |
| 鉄鈴 | | | | | |
| 4 | 蓬田大館遺跡 | 東調査区遺構外 | 5.1・0.2 | 2つの小穴・内外面緑青・丸に小石を用いる。鋳造 | 2 |
| 5 | | 第14号住居跡A炉前床面 | 5.2~5.4・0.2 | 上半部欠損・内外面緑青鋳造 | |
| 6 | 古館遺跡 | 第104号建物跡床面 | 5.5~5.8・0.15 | | 3 |
| 7 | | 遺構外6D-I層 | 推定5~6・- | 破片・木質付着 | |
| 8 | 高館遺跡 | 第4号住居跡覆土 | 4.0・0.25 | | 4 |
| 9 | | 第60号住居跡ビット内 | 7.5~8.0・0.2 | 鏡の可能性 | |
| 10 | 砂沢平遺跡 | 第13B号住居跡 | 5.3~5.7・0.2 | 丸有り | 5 |
| 11 | | 遺構外O-22 | 5.3~5.7・0.2 | 上部に方形貫通孔 | |

いる（註5）。近年では、林ノ前遺跡の調査で更に2点出土している。

県内出土例では、9を除いて径が約5cm前後でまとまりをみせる。鏡が径8cm前後であるのに比べると小さい。4は、2つの穴があり紐穴を有す紐部の痕跡と考えられる。

10は、頂部に幅5mm前後の断面方形の突起部を有していることから鏡の可能性も考えられるが小さい。9は、径8cm前後で大きさという点では、鏡の可能性がある。いずれにしても全形が残っていない以上鏡か鈴であるかの判断は難しい。次に製作方法について検討したい。鉄製鏡鈴部の製作方法は、日光男体山例は不明であるが、半球同士を真ん中で下を上に被せる形で接合している。このような製作方法は鉄鈴においても確認できる。10の砂沢平出土のものは、中程で段差があり下を上に被せる形で接合していることが肉眼観察やX線写真で判断できる。県外における鉄鈴についての集成や実見はできていないが、日光男体山出土の多数の鉄鈴・銅鈴が参考となる。銅鈴が50口、鉄鈴が88口出土している。銅鈴は、全体を鋳造するものがほとんどであるが、上下半分を板金で形作り、繋ぎ合わせるものも10口あまりある。鉄鈴は、鍛造ですべて上下を別作りとし繋ぎ合わせている。実測図から判断して、14に示したように下半部を上半部に被せるように繋ぐものが多い。このことは、鉄製鏡に限らず鉄鈴をはじめとする鈴の製作方法として一般的であったと言える。

雑部密教と鏡

(1) 鏡の分布（表2）

鉄鏡は、本遺跡出土のものを含めると先に述べたように青森県津軽地域で3例、岩手県宮古市山口館遺跡で1例、日光男体山1例の計5例である。宮古市は、秋田一盛岡を結ぶ延長線上にあり、このことから鉄製鏡は、日光男体山例を除けばおおよそ北緯40°以北に分布している。北緯40°以北は、いわゆる防御性集落の分布とも重なり興味深い。

一方、鉄鏡に時期的に先行すると考えられる銅鏡は、鋳型を含めて全国で19例あまり知られている。中世以降の鏡もいくつか残されているがここでは古代のみとした。東大寺二月堂の「堂司鈴」は、鎌倉時代の施入銘があるが、形が古式であり、この銘が製作時期と一致するものなのか懷疑的な意見もあるため（註6）、ここに含めた。また、鏡の時期的な問題以上に悔過会（十一面悔過）における具体的な使用方法が窺える点で重要な資料である。

さて、鏡の分布を概観するといいくつか地域的なまとまりが窺える。第一に東大寺をはじめとする畿内における古代文化圏の寺院（第一分布圏）、第二に北関東を中心とする関東地方（第二分布圏）、第三に石川県を中心とする北陸地方（第三分布圏）である。東北地方は、秋田県松峯寺伝来の1点のみである。この三鈷鏡は、「駅路の鈴」とされ、江戸時代（1801年）に発見されている。大館市北西方に位置する標高380mあまりの「大山」は、古くから靈場・信仰の場であり、鏡はかつて存在した密教系寺院の関連遺物と考えられる。「大山」は、伝承では、弘仁八（818）年に弘法大師空海が開山したとされ、事の真偽は別としても三鈷鏡の存在などから平安初期に遡る歴史が窺える。

第一分布圏は、雑密が伝来し、盛行した中心地域であり、奈良時代以来の雑密系の法会が今なお行われている地域である。これらの法会に用いられ、あるいは用いられた法具が伝存している。第二分布圏は、山岳信仰の靈場である日光男体山が所在し、山頂から奈良時代から平安時代にかけての多くの雑密系密教法具（以下、雑密法具）が出土している。また、8世紀中頃以降、「村落内寺院」と呼

ばれる集落内における仏教関連の建物遺構が多く見つかっている地域である。また、群馬県御殿前遺跡や茨城県新治村では、三鈷鏡の鋳型が出土しており、当地域においては鏡の製作も行われていたと推定される。第三分布圏では、能登や加賀国から雜密法具が比較的多く出土している。8世紀以降、この地域では寺院の建立が本格化し、9世紀以降になると淨水寺跡やヤシキダ遺跡などで雜密法具が出土する。このことから9世紀前後には、雜密の修法が行われていたことが窺える。能登と越中の国境に所在する石動山は、修驗道の拠点寺院として知られ、鹿島町小金森神田出土の鏡などは当地方における雜密の伝来と修驗との関連がうかがわれる。

銅製鏡の分布では、大きく3つの分布圏が捉えられたが、鉄製鏡については、松峯寺伝来の銅製鏡を含めておよそ北緯40°以北に分布することから、鏡における第四の分布圏として位置づけられる。

(2) 鏡を用いた仏教儀礼

鏡は、元々は陣中で合団として使用され、その形態からも把部を持って鈴部を打ち鳴らすことは雜密の儀礼においても容易に想像できるところであるが、使用法も含めてどのような儀礼が行われたのか検討してみたい。検討材料としては、出土状況、現在も継承されている仏教儀礼、これに記録類や絵巻物などの絵画資料の3つが挙げられる。

出土状況では、すでに時枝氏により、出土状況が窺える福水ヤシキダ遺跡や日光男体山山頂遺跡例から検討されている(註7)。福水ヤシキダ遺跡例は、井戸状遺構(關伽井と推定)の傍らから鏡等の仏具が出土しており、「銅鏡や土器に供物を盛り、錫杖や三鈷鏡を振り鳴らして神仏の降臨を仰いだ」様子を推定している。日光男体山例については、文献資料から雨乞い儀礼に関する儀礼が行われていたとし、これらの事例と東大寺二月堂修二会(お水取り)を含め、水にまつわる儀礼—農耕儀礼—に使用された可能性を指摘している。また、鏡等の仏具について意図的に廃棄された様子が窺え、廃棄行為も儀礼の中に組み込まれていたと推定する。この廃棄行為については、大峰山(奈良県)の発掘調査において検出された9世紀前半(延喜年間)と推定される石壇からも、法具や仏像が焚きこまれた形で出土しているという(註8)。また、内藤氏は、日光男体山出土鏡の中には鋳造時のバリや鋳損

表2 銅製鏡一覧表

| 番号 | 出土地・所蔵 | 長さ(cm) | 年代 | 備考 |
|----|----------------|--------|----------------|-----------------------|
| 1 | 法隆寺 | 18.5 | 奈良時代(8世紀) | 柄部円柱形・紐穴・現東京国立博物館所蔵 |
| 2 | 東大寺 | (28.7) | 鎌倉時代(弘安八年施入) | 二月堂修二会堂司鏡・中鈷欠 |
| 3 | 東大寺 | 20.1 | 鎌倉時代(弘安八年施入) | 柄部円柱形・紐穴 |
| 4 | 御殿前遺跡(群馬県) | — | | 三鈷鏡鋳型 |
| 5 | 円福寺(千葉県) | 28.0 | 奈良時代(8世紀) | 鈴部亀裂 |
| 6 | 鹿島神宮(茨城県) | 29.8 | 平安時代前半 | 詳細不明・柄補修 |
| 7 | 鉢形遺跡(茨城県) | — | 平安時代(9世紀代) | |
| 8 | 小野沢遺跡(茨城県) | — | 平安時代(9世紀代) | 鈴部破片資料 |
| 9 | 新治村例(茨城県) | — | 平安末~鎌倉時代 | 三鈷鏡鋳型 |
| 10 | 日光男体山山頂遺跡(栃木県) | 26.7 | 奈良時代(8世紀) | 大正13年出土 |
| 11 | | 26.6 | | H地区出土 |
| 12 | | 25.0 | 奈良~平安前期 | H地区出土 |
| 13 | | 22.0 | (8~9世紀) | Kトレンチ出土 |
| 14 | | (15.0) | | Dトレンチ出土・三鈷・柄部欠 |
| 15 | 木部新保遺跡(福井県) | 24.5 | 平安時代前期(9~10世紀) | 民家敷地より出土・脇鈷欠・鈴部亀裂・個人蔵 |
| 16 | 福水ヤシキダ遺跡(石川県) | 26.7 | 平安時代初期 | |
| 17 | 淨水寺跡(石川県) | — | | 三鈷破片資料 |
| 18 | 小金森神田(石川県) | — | | 三鈷欠 |
| 19 | 松峯寺(秋田県) | 24.6 | 平安時代(9世紀) | 旧佐竹家蔵品・現東京国立博物館所蔵 |

じと思われるものが含まれることから奉納を前提としていた可能性を考えている（註9）。

本遺跡や五輪野遺跡では、出土状況からその儀礼を推定することは難しいが、なんらかの儀礼が行われた後、廃棄されたものと考えられる。水にまつわると言えば、鏡が出土した3号住居跡は、高屋敷館III遺跡第120号溝跡に近くであり、この溝跡からは、蓮華文墨書皿や耳皿が出土している。このような遺構・遺物と鏡などの仏具がなんらか有機的な関連－例えば儀礼－を持っている可能性も考えられるところである。

現存する仏教儀礼については、東大寺二月堂修二会（お水取り）や法隆寺金堂修正会が知られている。お水取りでは、「堂司鈴」として知られるが、四職（大導師・和上・呪師・司）が用いる。作法の区切りの合図や呪師による四王の勧請、四職の四方加持に用いられる。法隆寺では、加持杖を持って鏡や法螺貝を鳴らしながら金堂内を小走りに回る動作が見られるという。内藤氏によれば、鏡の使用について「鈴の音色に招霊や魔除けの意味を託した古い信仰形態を伝えている」とする。また、お水取りでは、振り鳴らす以外に床を打ち鳴らす所作も加わるようである。このような激しい動作は、柄香炉においても見られる。鏡には、破損や補修の痕跡がみられるものが多いことから、氏は激しい動作による可能性を指摘している（註10）。記録類や絵巻物については、二月堂縁起絵巻などが挙げられるが資料を精査していないためここでは、取り上げない。出土状況や現存の仏教儀礼の検討から、鏡は、その音に招霊や魔除けの意味があり、水にまつわる儀礼に関連していることが指摘されている。

東北地方における雑部密教の拡がり

雑密の拡がりを検討するには、雑密法具の出土、仏教関連遺構、そして十一面や千手などの觀音、吉祥天像などの雑密像が資料として挙げられる。

（1）雑密系密教法具

雑密系密教法具は、9世紀以降に伝來した純密で用いる法具と異なり、修法においても体系化されておらず種類も限られている。結界具としての三鉢杵、錫杖などの杖類、鏡（三鉢）、柄香炉である。鏡は、雑密特有の法具で逆刺を作る忿怒形の古式三鉢杵は奈良時代の特徴である。雑密では、法具を配置する壇を用いない修法が行われたと考えられており、これらの法具の存在は重要である。

三鉢杵（古式） 奈良国立博物館蔵の銅三鉢杵、正倉院宝物の白銅三鉢杵・鉄三鉢杵、弥山山頂出土の金銅三鉢杵（奈良県）、日光男体山山頂出土の銅三鉢杵、慧日寺伝世品の銅三鉢杵（福島県）が古式三鉢杵として知られている。分布は限られており、西日本には残されていない。東北地方では、福島県磐梯町・慧日寺に伝徳一所有の三鉢杵が近年まで伝えられていた。徳一は、法相宗元興寺系に属する東大寺僧であったが、修行のため会津（磐梯山麓）に移住し、大同年間には慧日寺を開創したと伝えられる。空海が徳一に書写弘通を依頼した新しい密教書に対して書かれた『真言宗未決文』は、雑密の立場から著されたとされる。三鉢杵の存在や徳一の事績からも、9世紀初めには、東北南部まで雑密が伝わっていたことが窺える。

錫杖 僧具として近世まで一般的にみられる法具であるが、古代においては鏡や三鉢杵と比べて数が多いものの出土は限られている。鉄製のものは、輪王寺1柄（伝勝道上人所持）、日光男体山山頂遺跡（栃木県）20柄、山口館跡（岩手県）（図2-16）・李平下安原遺跡（9世紀・青森県）（図2-15）で各1柄、鹿の子C遺跡では手錫杖1柄（9世紀前・茨城県）などである。

銅製は、妙楽寺経塚1柄（平安後期・兵庫県）、正倉院宝物1柄、法隆寺1柄、大峰山山頂遺跡1柄、那智経塚1柄（8世紀・和歌山県）、日光男体山15柄、鉢形神宮寺経塚1柄（11世紀・茨城県）、福水ヤシキダ遺跡2柄（石川県）、大日岳山頂遺跡1柄・劍岳山頂遺跡各1柄（富山県）、塚山山岳信仰遺跡1柄（平安後期・埼玉県）、極楽寺（国見山廃寺）伝世1柄（岩手県）、鋳型では日月遺跡（平安後期・埼玉県）、友成遺跡（10世紀後半・群馬県）（註11）などである。

柄香炉 柄先端の形態によって鶴尾形・獅子鎮・瓶鎮・蓮華形の大きく4つに分けられており、その多くが銅製である。鶴尾形は、最も古い形態とされ、飛鳥・奈良時代の遺品が多い。法隆寺献納宝物（東京国立博物館蔵）に2柄見られる。獅子鎮形は、奈良時代の遺品が多く、正倉院宝物、法隆寺献納宝物が代表例である。瓶鎮形は平安時代以降とされ、日光男体山山頂出土の銅製柄香炉1柄（平安前期・9世紀）、那智経塚出土1柄（平安後期）が挙げられる。蓮華形は鎌倉時代以降とされるところからここには含めない。今日の残されている柄香炉は伝世品が多く、出土品は少ない。出土品は、先の例も含めて、日光男体山から残欠を含め8点出土しており、奈良～平安前期の所産と考えられている。東北地方においては、三鉛鏡とともに五輪野遺跡から鉄製柄香炉（杏葉形飾り金具・蓋は銅製、10世紀後半）（図2-17）1柄が出土している。このほかの例としては管見では不明である。

仏具のなかでも仏教伝来とともにたらされた古いもので、供養具または僧具の一つに数えられる。柄香炉は、僧の必須道具であり、仏の供養や經典や自らを淨めるために用いる。東大寺二月堂修二会では、鏡とともに法会において用いられている。「大導師柄香炉」と呼ばれ、法会のなかで床を滑らせたり、叩いたりと激しい動作が見られる（註12）。五輪野例については日光男体山例と比べて杏葉形飾り金具の透かし部分などに簡略化がみられ、やや新しく考えられる。

（2）仏教関連遺構について

東国の奈良～平安期の集落遺跡において小規模の仏堂様建物跡の検出、仏具など仏教遺物の出土がみられる遺跡については、本格的な伽藍を配す寺院に対して一般的に「村落内寺院」と呼称されている。「村落内寺院」の存在については、千葉県下の事例を契機に須田氏により提唱され、その後は関東各地においてもその存在が知られるようになった。また、その性格について須田氏は、以下のような考え方を示している。「村落内寺院」にみられる双堂建物跡は、雑密の影響を受けて成立した密教建築であり、そこでの仏教信仰の中心は雑密系の変化觀音にあり、農民層の悔過法会が主に行われた施設とする（註13）。時期については、8世紀後半から9世紀後半に盛期があり、10世紀前半まで見られるようである。須田氏は、8世紀中頃には東国の村落においても悔過法会が開始されたとみている。このような「村落内寺院」の検討に従えば、関東を中心とする東国では、8世紀中頃以降には、雑密が一般の集落において浸透していた様子がうかがえる。

東北地方においては南部の福島や宮城に「村落内寺院」に相当する仏教関連遺構が検出されている。「村落内寺院」の拡がりについては、富永氏や沼山氏により、甲信地方や東北地方南部までの遺跡事例が挙げられている。福島県下悪戸遺跡、達中久保遺跡、正直C遺跡、東山田遺跡、宮城県壇の越遺跡などである。仏堂とされる掘立柱建物跡が検出されており、福島県では8世紀末から9世紀代、宮城県では9世紀末から10世紀初め頃とされ、宮城県以北では、関東に比べて時期的に後出するとされる（註14）。

東北北部では、岩手県南部の北上盆地周辺で仏教関連遺構が比較的多く検出されている。北上市・南部工業団地内遺跡K区、鬼柳Ⅲ遺跡、岩崎台地遺跡群、北部の岩手町・黄金堂遺跡、どじの沢遺跡、遠野市・高瀬Ⅰ遺跡では、集落の中に小さな仏堂跡と考えられる遺構が検出されている（註15）。北上市周辺には、胆沢城と関連する定額寺—極楽寺—と目される国見山廃寺をはじめとする古代寺院跡が存在し、古代まで遡るものか不明であるが、千手堂や観音館などの地名もみられる。「村落内寺院」に相当する仏教関連遺構は、東北北部でも南部まで及んでおり、一般集落まで仏教が普及していた様子が窺われる。鬼柳Ⅲ遺跡などで検出される双堂建物跡は、密教建築と考えられることから密教の修法が行われていた可能性がある。これらの遺跡で検出された遺構の時期については、9世紀後半以降に出現し、10世紀代にわたることされている（註15）。

北緯40°以北の北奥においては、「村落内寺院」に相当するような遺構は見つかっておらず、雑密法具がわずかに出土するのが現状である。

（3）悔過と觀音信仰

純密伝来以前の雑密においては変化觀音が信仰の中心であった。変化觀音への信仰を示すものが悔過会である。悔過会とは、雑密の儀礼であり、信仰する本尊の前で文字通り罪過を悔いることで、その功德によって罪が消え、願いが成就するという経説に基づく法会である。今日も一部の寺院で行われている修正会・修二会がそれに当たる。悔過会の初現は、『日本書紀』にみえる皇極元年（642）蘇我蝦夷発議による雨乞いの悔過とされる。8世紀初頭まで災難除去を祈願する臨時の催しであったようで僧俗が共に行っていたことが窺われる。7世紀末から8世紀初頭には、すでに変化觀音である十一面觀音の造立（法隆寺金堂外陣壁画）^{うばそく}や優婆塞や官寺の僧により山林修行の記述がみられる。これらは、雑密經典に基づくものである。8世紀前半には、道慈や玄昉らの帰國によって更なる密教經典が請來された。玄昉は、千手觀音を信仰していたとされる。8世紀の中頃には、悔過会の増加・変化觀音信仰が普及し、その契機としては、実忠による東大寺二月堂十一面悔過（修二会）の開始や天皇とその看病禪師による変化觀音への信仰があったものと考えられる。雑密像の代表例では、東大寺法華堂不空羈索觀音立像（748年）^{きじょう}が挙げられる。8世紀後半になると変化觀音造像の本格化や吉祥天悔過の盛行がみられる。吉祥天は、元々インドにおいて吉祥（幸福）を司る女神として信仰されており、『金光明最勝王經』が説く功德は、五穀豊穣である。『続日本紀』神護景雲元年（767年）によると畿内七道の国分寺で吉祥天悔過之法を恒例とする詔を契機として諸国に広まったことが窺える。この背景には、飢饉等の天災を防ぎ、国家の安定を図るという国家的な願いがあったものと思われる。9世紀前半には国府においても吉祥悔過が行われるようになったことが記録に見られる。8世紀後半は、東国で「村落内寺院」の増加が見られ、これらの仏堂跡が悔過の行われた施設であるとするならば吉祥悔過などの悔過の広がりとの関連が考えられる。9世紀の初めには、空海の帰國により純密が伝えられ、これ以降雑密から純密への移行していったようである。9世紀の中頃には、悔過の沈滯が見られるとされ、10世紀前半には「村落内寺院」が消滅する。

佛教の法会には、大きく読経会、悔過会、論議会の3つがあるが、そのなかで悔過会は、現世利益的側面が強い法会であり、それは人々にとってわかり易く現実的な願いに答えるものだったため、悔過の広がりやその本尊である薬師如来や吉祥天、変化觀音への信仰の広がったことが考えられる。悔

過会については佐藤氏の研究があり、全国で50例あまりの現存例があり、中絶したものを含めると90例あまりになるという。薬師・十一面・千手・阿弥陀・吉祥天が多く、薬師・吉祥天・十一面悔過会は南都を中心とする古代文化圏に残されているとする。現存例は、修正会と修二会のみで、法会の形として「二時型」と「六時型」の二形態に分けられ、經典の經説に忠実な後者は南都中心、祈願の部分が強調されて悔過作法の簡略化がみられる前者は南都以外の地域に分布すると指摘している（註16）。東北地方においては、山形県・若松寺（千手觀音）、慈恩寺（阿弥陀如来・中絶）、宮城県・陸奥国分寺（吉祥天）、岩手県・毛越寺（阿弥陀如来）、中尊寺（吉祥天）例が挙げられる。

これらの現存する悔過がいつどのような契機で始められたのか不明な部分が多いが、8世紀後半や9世紀前半の国分寺や国庁に対する吉祥悔過之法の詔や会津における徳一の事績などから、その頃には東北南部を中心とする地域まで雑密が伝わっていたことは確実である。時代は下るが、福島県・あつた めじょうり荒田目条里遺跡では「千手懺悔過」と書かれた木簡（9～11世紀前葉か）が出土している。沙弥などの修行に関わる記録類と推定されており、実際に悔過が行われていた様子が窺える資料である（註17）。

次に悔過の本尊たる変化觀音（十一面・千手など）、薬師如来、吉祥天の造像の様相について検討したい。それらの仏像のすべてが南都を発信源にした雑密の影響において造られたとする根拠はないが、悔過の広がりの一端を窺うことが可能と考えられるからである。また、東北地方は比較的原始・古代からの基層信仰の名残が窺え、仏像においても素朴なものが多く、立木仏や桂清水などのように基層信仰（靈木靈泉信仰）に上手く佛教を取り入れたような古き形を残したもののが見られる（註18）。また、比較的古い仏像も各地に残され、古代佛教とその信仰の面影が少なからずうかがわれる。

東北地方に残る悔過に関わりの深い仏像の分布を示したものが図3である。東北地方には、白鳳期前後の小金銅仏が十体前後残されているが、それを除いては平安時代以降の造像になる。奈良時代の8世紀においては、北関東の栃木県中央部では、大谷磨崖仏千手觀音菩薩立像に見られるように変化觀音の造像がみられる。続く平安初期には、大関觀音堂觀音菩薩立像、羽下薬師堂薬師如来立像（ともに宇都宮市）の造像がみられる（註19）。同県北西部に位置する日光山は8世紀末に勝道上人によって開山されたと伝えられ、中禪寺には立木觀音と称される平安後期の十一面觀音立像が残されている。東北南部では、弘仁元年（810）に徳一開基と伝えられる勝常寺しうじょうじ（福島県・湯川村）・薬師如來坐像、聖觀音像、十一面觀音立像が平安初期の造像と考えられる。磐梯町・慧日寺や会津坂下町・淨泉寺も徳一開基とされ（伝大同二年開基）、古式三鈷杵（8～9世紀頃）や平安前期の薬師如來座像が伝えられている。これらの仏像は、徳一の活動との関連が強く考えられるものであり、9世紀前半には東北南部の福島あたりまで変化觀音等の造像がみられる。薬師如來については、その功德によって最も人々に受け入れられ広まった仏のひとつに数えられるが、9世紀後半には黒石寺像（貞觀四年（862）胎内銘・岩手県水沢市）、10世紀前半には双林寺像（宮城県築館町）など、北東北南部まで造像がみられる。平安後期になると定徳寺（福島県）・中尊寺（岩手県）・立石寺（山形県）に薬師の造像がみられる。

吉祥天は、陸奥国分寺や中尊寺の悔過にみられるが仏像はあまり残されていない。岩手県東和町・成島毘沙門堂の伝吉祥天像は、平安前期（9世紀末～10初）の造像とみられる。このほか平安前期に遡るものはみられない。平安後期になると天台寺（岩手県・淨法寺町）・伝吉祥天像が知られる。8世紀後半から9世紀代にかけて国家的な政策のもと広まったと考えられる程には、その仏像は残さ

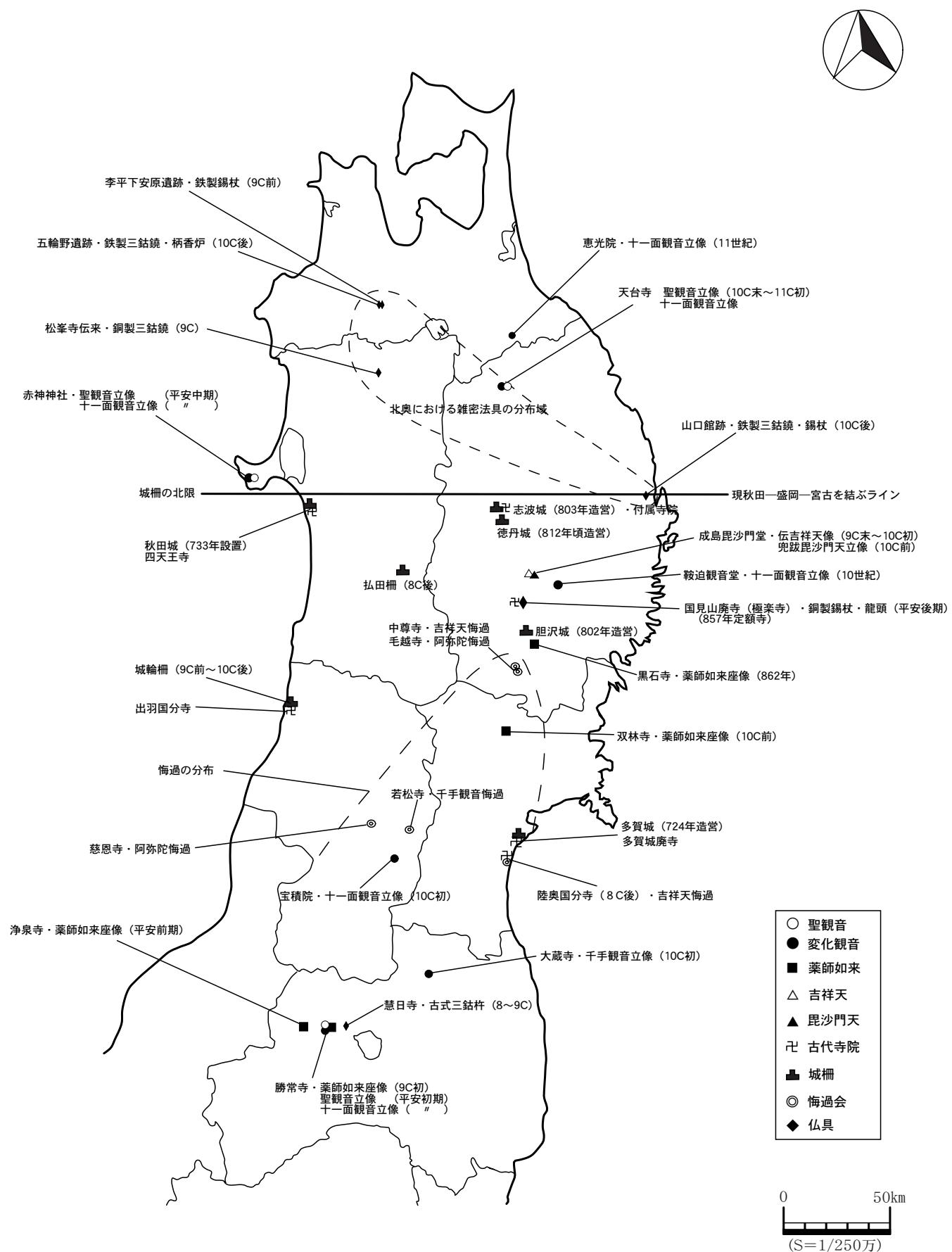


図145 東北地方における主な城柵・寺院の造営と仏像・仏具の分布－平安前・中期－

れていない。しかしながら、仏教で吉祥天が妃とされる毘沙門天（または兜跋毘沙門天）の造像は多い。毘沙門天は、四天王の内、北方を守護する多聞天が独尊となった場合の呼び名であり、兜跋毘沙門天は、^{いてき}毘沙門天から変化したもので夷狄征服の守護神とされる。岩手県東和町・成島毘沙門堂（10世紀前半）、同北上市・立花毘沙門堂（10～11世紀）、天台寺（10世紀末から11世紀初）、平安後期では江刺市・藤里毘沙門堂（愛宕神社）、秋田市・道川神社などの例が挙げられる。佐藤氏は、これらの像について多聞天の北方鎮護の意味合いと兜跋毘沙門天の夷狄征服の目的を兼ね備えたものと推定している。また、東北における兜跋毘沙門天の造像の背景を天台系勢力との関連を想定している（註20）。吉祥天と毘沙門天は、およそ10世紀前半には、北東北南部まで造像がみられる。

さて9世紀前半・東北南部まで見られる変化観音の造像は、10世紀初頭には、大蔵寺（千手・福島市）、宝積院（十一面・山形市）に見られやや北上する。宝積院像は、貞觀八年（866）に定額寺に定められた瑜伽寺にあったと伝えられるもので中央で製作されたものと考えられている。ほかに10世紀代と考えられるものは、鞍迫觀音堂（岩手県・宮守村）、吉祥院（千手か・山形市）などの十一面觀音像で、岩手県南部まで確認できる。平安後期になると十一面觀音の造像は多く、明光寺（会津若松市）、松尾院觀音堂（山形市）、東樂寺（岩手県玉山村）、凌雲寺（同東和町）、長谷寺（同大船渡市）、秋田県中仙町・小沼神社や水神社（鏡像）等が挙げられる。

北緯40°以北の北奥においては、平安時代の造像は少ないが、そのなかにあって天台寺の諸像は特異である。聖觀音立像は、鉈彫像でも初期と考えられ、年代の比定は難しいが、平安時代中期（10世紀末～11世紀初か）と推定されている。十一面觀音立像は聖觀音像よりもやや新しいと思われるが酷似するものである。北奥にあってこれらの諸像は、異例の存在であるが、10世紀の終わりには、北奥まで変化觀音等の造像が確認できる。

天台寺以北に位置する青森県については、9世紀や10世紀に遡るような変化觀音その他の造像は確認できない。しかしながら、かなり古く遡る可能性のある觀音信仰の痕跡がいくつか窺える（註21）。例えば、県南部太平洋側では、八戸市是川・清水寺觀音堂、階上町赤保内・寺下觀音堂が挙げられる。清水寺觀音堂は、かつては十一面觀音が本尊とされ、慈覺大師や坂上田村麻呂の創建伝承が残る。寺下觀音堂は、聖觀音を本尊とし、神龜年間あるいは大同年間の創建伝承が残る。津軽では、弘前市十腰内鎮座の巖鬼山神社の社伝では、旧社は、岩木山北麓・巖鬼山西方寺觀音院であり8世紀末（796）に遡り、十一面觀音が本尊であったという。坂上田村麻呂が再建とも伝えられる。これらは、あくまでも伝承であるが、巖鬼山神社の場合は、岩木山南麓の百沢寺、岩木山神社へと変遷する岩木山信仰にあって、その始まりが変化觀音信仰にあるとすれば興味深い。また、時期はやや下るが、南部町・恵光院（元長谷寺）には、11世紀代と思われる十一面觀音立像が残されている。位置的に天台寺に近いことから関連が考えられる。また、平安時代の修驗道場の中心であったと考えられる阿闍羅山（大鰐町・碇ヶ関村）は、銅製三鈷鏡が出土した松峰寺（秋田県大館市北西）と距離的に近い。松峰寺出土の鏡は、9世紀頃と考えられ、阿闍羅山での修驗の開始と雑密とが関連あるものであれば、先の岩木山北麓における觀音信仰も雑密の伝播として捉えることも可能で、伝承として今日残されている可能性がある。この点については推測の域を出ないため、検討課題としたい。

(4) 北奥における雑密系密教法具出土の意義

鉄製鏡の出土は、現在までのところ北東北に限られている。特に国の直接支配の及ばなかった北奥地域では、これまで仏教関連遺物の出土が少ないこともあって古代における仏教の受容と実体についてあまり議論されてこなかった問題である。近年、古代の祭祀遺物が多数出土した青森市・新田(1)遺跡では、10~11世紀代の溝跡から祭祀具とともに木製の仏像や光背などが出土し、古代の祭祀や信仰について注目されている。他の遺跡においても津軽を中心に蓮華文墨書土器(註22)など仏教系の遺物が散見されるところである。まとめとして、北奥における鏡出土の意味について考えてみたい。

鏡の出土は、そのまま解釈すれば、奈良時代に南都を中心に流行し、拡がりをみせた雑密が伝わっていたこととなり、その修法が執り行われていたことになる。そしてその時期は、雑密の盛期を奈良時代後半から平安時代前期とすれば、それからやや遅れ、平安時代中期前半(10世紀後半前後)頃とすることができる。鏡の三鉢形は、極めて形骸化・簡略化しており、銅製に後出する鉄製ということもからも時間の経過が認められる。

この点については、時枝氏は、日光男体山例から「8・9世紀の関東地方で流行した後に、東北地方に伝播し、10世紀に北東北で最後の隆盛期を迎えた可能性が高い。」と推定している(註23)。

鏡の出土は、北陸地方と東北地方北部に顕著であり、先に挙げた悔過会の分布、雑密法具の出土、仏教関連構造の検出、変化観音や薬師信仰による造像等を含めて検討すると南都を発信源とする雑密が東日本に拡がり、その余波としてこのような地域に伝えられた可能性が考えられる。雑密が拡がった背景として考えられるのは、律令国家によって進められた辺境支配・蝦夷支配政策が挙げられる。城柵の造営や郡の設置とそれに伴う移民の影響である。城柵には、付属寺院や律令的な祭祀を執り行う場所が伴うことが知られる。移民は、文献資料のほか、具体的にその事実を示す遺物(東國の人名が書かれた墨書土器など)の出土(註24)も見られる。また城柵造営とともに重要なのが国分寺の建立であり、定額寺の制定である。東国における「村落内寺院」については、国分寺や定額寺などを中心とした布教のネットワークが推定されており、大きな影響が考えられる(註25)。これらの国家的な政策のほか、徳一を中心とする僧侶の活動がある。会津における徳一の事績には大きなものがある。徳一は、東大寺僧であり、そのような南都僧の布教が東北南部などで認められる。およそ北緯40°以北に当たる北奥は、国の直接支配が及ばない「化外の地」とされるが、雑密においては本州北端まで及んでいたことを鏡の出土は示していると言える。

まとめ

当遺跡出土の鉄製鏡の考察から古代北東北における仏教の浸透を主に雑密との関係で捉えた。しかしながら、県内においては鏡のほか仏教の実体を示す遺物の出土が少ないとから、どのような形で仏教が取り入れられ、どのような儀礼が行われていたのかを推定するには、まだまだ検討の材料が不足している。また、従来言われている北陸地方などからの須恵器・製塩・鉄器製作技術の伝播と仏教伝来についての関連、鉄鏡については、古代における鉄器製作という視点からの考察が必要である。発掘調査によって散見される仏教系遺物、県外の周辺地域を含め、仏像や古代寺院跡などの資料を集め、総合的に検討していくことが必要である。そして、文献にみられる北東北の歴史事象との関連を検討し、位置づけていくことが大きな課題と思われる。

(山田)

- 註1 村上隆ほか 2005 「「銅鑑」を用いた古代の鉄接合技術」『文化財保存修復学会第27回大会研究発表要旨集』文化財保存修復学会
- 註2 小保内裕之 1999 「2青森県」『考古学論究』第5号〈特集出土仏具の世界〉立正大学考古学会
- 註3 青森県教育委員会 1997 『垂柳遺跡・五輪野遺跡』
- 註4 時枝務 2002 「平安時代前期における山岳宗教の動向—三鈷鏡を手がかりに—」『山岳修験』第29号 日本山岳修験学会
- 註5 下山信昭 1996 「東北地方における土鈴集成」『研究紀要』第1号 青森県埋蔵文化財調査センター
- 註6・註7 註4文献
- 註8 菅谷文則 2000 「山林仏教の密教世界」『日本密教』所収 春秋社
- 註9 内藤榮 2005 「古密教展概説」『古密教』図録 奈良国立博物館
- 註10 註9文献
- 註11 群馬県立博物館 2004 『群馬発掘情報』新発見考古速報展図録
- 註12 奈良国立博物館 2000 『東大寺二月堂とお水取り』図録
- 註13 須田勉 2005 「村落寺院の構造とその信仰」『古代の信仰を考える』第71回日本考古学協会総会国土館大学実行委員会
- 註14 富永樹之 1994・1995・1996 「村落内寺院」の展開（上）（中）（下）『神奈川考古』第30・31・32号 神奈川考古同人会
沼山源喜治 1999・2002 「北上盆地の古代集落における仏神信仰（I）（II）」『紀要』第1・2号 北上市埋蔵文化財センター
- 註15 註14 沼山文献
- 註16 佐藤道子 1999 「儀礼にみる日本の仏教」『国宝と歴史の旅 仏堂の空間と儀式』朝日新聞社
2001 「法会のかたち」『儀礼にみる日本の仏教』法藏館
- 註17 いわき市教育委員会 2001 『荒田目条里遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第75冊
- 註18 大矢氏は、天台寺の本尊「桂泉觀音」を例にとって、東北各地にみられる靈木靈泉信仰「桂清水」などの基層信仰が聖によって觀音信仰など仏教に置き換えられたとする。（1999「仏像からみた東北仏教の受容と変容」『東北の交流史』）
- 註19 北口英雄 1998 「栃木県の仏像」『栃木県の仏像』栃木県立博物館
- 註20 佐藤昭夫 1984 『みちのくの仏像』日本の美術221
- 註21 青森県高等学校地方史研究会編 1996 『青森県の歴史散歩』山川出版社
- 註22 青森県教育委員会 2005 『高屋敷館Ⅲ遺跡』
- 註23 註4文献
- 註24 胆沢城出土の9世紀前半の土器には、「上毛野朝臣廣世」と記されている。東国や北陸からの移住が考えられている。
- 註25 笹生衛 2002 「東国古代集落内の仏教信仰と神祇信仰」『祭祀考古学』第3号 祭祀考古学会

掲載図文献

- 1 青森県教育委員会 1997 『垂柳遺跡・五輪野遺跡』
- 2 桜井清彦・菊池徹夫編 1987 『蓬田大館遺跡』早稲田大学文学部考古学研究室報告
- 3 青森県教育委員会 1980 『碇ヶ関村古館遺跡発掘調査報告書』
- 4 青森県教育委員会 1978 『黒石市高館遺跡発掘調査報告書』
- 5 青森県教育委員会 1980 『大鰐町砂沢平遺跡』

発掘調査報告書

- 青森県教育委員会 1987 『李平下安原遺跡』
- 日光二荒山神社編 1963 『日光男体山山頂遺跡発掘調査報告書』角川書店
- 北上市教育委員会 1972 『北上市極楽寺跡』
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999 『山口館跡発掘調査報告書』
- いわき市教育委員会 2001 『荒田目条里遺跡』

主要参考文献

- 立川武蔵・頼富本宏編 2000 『日本密教』春秋社
- 奈良国立博物館 2005 『特別展 古密教 日本密教の胎動』図録
- 奈良女子大学古代学学術研究センター設立準備室編 2001 『儀礼にみる日本の仏教』法藏館
- 坂誥秀一編 2003 『仏教考古学事典』雄山閣
- 石田茂作監修 1984 『新版仏教考古学講座』第5巻仏具 雄山閣
- 蔵田蔵編 1967 『仏具』日本の美術16 至文堂
- 鈴木規夫 1989 『供養具と僧具』283 至文堂
- 立正大学考古学会 1999 『考古学論究』第5号〈特集出土仏具の世界〉
- 第71回日本考古学協会総会国士館大学実行委員会 2005 『古代の信仰を考える』
- 石川考古学研究会 1997 『祭祀具』石川県考古資料調査・集成事業報告書
- 佐藤昭夫 1984 『みちのくの仏像』日本の美術221 至文堂
- 東北歴史博物館 1999 『祈りのかたち 東北地方の仏像』
- 大矢邦宣 1999 「仏像からみた東北仏教の受容と変容」『東北の交流史』無明舎出版
- 岩手日報社 2001 『いわて未来への遺産 古代・中世を歩く 奈良～安土桃山時代』
- 小嶋芳孝 2004 「錫杖状鉄製品と蝦夷の宗教」『アイヌ文化の成立』北海道出版企画センター
- 高杉博章 2004 「神仏を祀る古代津軽のムラ」『時空をこえた対話』
- 村上隆 2003 『金工技術』日本の美術443 至文堂